

## ■軍議

軍議はこの朝、織田家の安土下屋敷で行われる事になっていた。安土山上にあった上屋敷は焼かれてしまったが麓に位置する下屋敷は健在だった。本来は織田家嫡男、信長の孫にあたる三法師と現当主である織田信雄の屋敷だが、三法師はまだ三歳であり、その後見人である信雄は秀吉と入れ替わる形で伊勢長島の滝川攻めに出陣し不在である。この信雄の伊勢長島出陣は事実上の厄介払いであり、これによって秀吉が誰に邪魔される事も無く今度の戦で総大将の座に就いている。

辰の刻を告げる鐘が鳴り響く前に既に全員が大広間に集まっていた。秀長を始めとする羽柴家の武将、秀吉の傘下の外様大名などで十五人前後は居る。部屋が一番奥にある置の大将席に秀吉の姿はまだない。軍議の場に最後に入ってくるのは信長が好んだ行動だ。それを真似て誰が織田家の主かを示す気なのだろう。一座を見回した秀長は見知らぬ顔が一人居るのに気が付き、隣に居た堀久太郎秀政に声を掛けた。

「久太郎、あれは誰だ。ほれ、その奥の」

堀は信長の親衛隊、馬回り衆筆頭を長く務めていた男で、本能寺の変後、秀吉に請われ羽柴家に入っていた。戦も政治もこなせる万能型の才人で、羽柴の姓を名乗る事を許されるほど秀吉から信頼を受けている。ただし本人が恐れ多いとして、未だに公文書に署名する時以外の名乗りは堀久太郎のままだ。

堀はかつて信長の秘書的な仕事も兼ねていたため、家内の人間の顔を良く知っている。秀長の視線を追うと、一座の奥に座る小柄な男の姿があった。幸い、その顔には覚えがある。

「柴田伊賀守殿の戦奉行、山路将監（しょうげん）正国殿かと」

「ああ、長浜城のか。だが肝心の柴田伊賀守殿が見えぬな」

「療養のため城から京に出されたと聞いております。将監殿はその代理でしょう」

柴田伊賀守勝豊は敵である柴田勝家の養子の一人だ。勝家には複数の養子が居たが、その中でも筆頭と見られていた男である。ところが昨年末、居城の長浜城を秀吉に攻められるとあっさり羽柴側に寝返ってしまった。どうも養父の柴田勝家とはソリが合わず、長年、あまりいい関係では無かったらしい。よって今は羽柴側にあって戦っている。ただし当時から既に体調を崩しており、さらに悪化した今では床から立てなくなったと聞く。その伊賀守が京に送られたのが事実なら、今回の戦において大きな意味を持つだろう。その居城、長浜城は琵琶湖東岸を南下して来る柴田軍を迎え撃つ要衝にあり、重要な拠点となるからだ。そもそも長浜城は長年、羽柴家の本拠地だった城でありその設計は秀吉自身である。本能寺の変の後、柴田との駆け引きでこれを開け渡していたのだが、再び取り返した形になった。恐らく秀吉はこの城を戦の拠点にするだろう。城主不在ならその辺りの話は極めて単純になる。悪くない状況と言っている。

間もなく入り口の戸がガラリと開いて秀吉が入って来た。そのまま勢いよく畳の台座に座る。その陰に隠れるように座ったのは、事務方の奉行衆の一人、石田佐吉三成だ。先日、奉行衆に抜擢されたばかりの若者であり、軍議に顔を出すのは初めてだった。一座を見回した秀吉が口を開く。

「柴田勝家が柳ヶ瀬に着陣した。ウチの天神山城の北、刀根峠の下の村だな」

一呼吸置いて秀吉は話を続ける。

「勝家が佐々と金森を地元に置いて出て来たのは確かだ。となると手持ちの兵はせいぜい三万以下。対して我らの軍勢は五万。よって数で正面から押し潰す。これより陣構えを申し渡す。久太郎」

秀吉は堀の方を向いて声を掛ける。

「柴田軍の先鋒は恐らく又左（またざ）だろう。手強い。よってウチの先鋒大将はお前だ。励め」

この秀吉の言葉を受け、堀が耳まで赤くして感激しているのが秀長にも判った。戦の先鋒を務めるのは大将が最も信頼している武将である。それを軍議の場において名指しで宣言されたのだ。まだ若く血の氣が多い堀がその名譽に感激するのも当然だった。兄者は人の扱いが上手い、と秀長は改めて思う。短気でぶっきらぼうで口が悪いのだが、不

思議と秀吉は人の心の機微を読み、自在に操る才能があった。これは信長には無かったものだ。信長の場合、そのカリスマ性により問答無用で全員を引きずって行った印象が強い。逆に言えば、秀吉にそういったカリスマ性は薄い。

「続いて柴田伊賀守の軍勢が次鋒に入れ。お主なら柴田の戦にも詳しかろう」

秀長が顔を知らなかった武将、山路将監が手をついて頭を下げる。

「承知」

秀吉はそこから中堅、大将の陣に入る各指揮官を指名し次々と軍勢を配置して行く。最終的に約五万の兵が十四段構えを成す大軍勢となった。これで北国街道を北上、そのまま柴田軍を押しつぶす。十四段目の本陣は秀吉の軍勢だが、その前には外様大名の中でも闘将として知られる中川瀬兵衛清秀、高山右近重友、細川与一郎忠興の三人を置いた。これはお前らが最後の砦である、信頼しているぞという意味を持つ。これもまた秀吉らしい配慮だった。逆に柴田伊賀守の軍勢を本陣から遠い、先鋒の直後に置いたのは、まだ完全に信頼しているわけでは無いという無言の意思表示だろう。ここならもし裏切られてもすぐに後方から潰せるのだ。

「それで兄者、いつ動く」

「伊勢長島の滝川の城はあと一月あれば落ちる。それまでに柴田は南下し救援せにやならん。間もなく動くだろうぜ。それを待つ。やつらが街道を南下し始めたら討って出る。久太郎、お前は伊賀守の軍勢と先に長浜城に入っておけ」

「承知」

「戦場は虎午前山の一带だな。あそこなら自在に決戦できよう」

そう言うってから秀吉は一座を見回し声を掛ける。

「誰か何かあるか」

「上様」

姫路から呼び出された羽柴家宿老の一人、黒田官兵衛孝高（よしとか）が声を上げる。

「官兵衛か。何だ」

「又左殿は、やはり柴田に付きまするか」

前田利家と秀吉の仲は誰もが知っていた。織田家の生え抜きと外様という全く異なる立場ながら意気投合、子の無い秀吉夫婦が利家の娘を養子として引き取るほどの間柄だった。その利家の戦上手ぶりは柴田軍の中では頭一つ抜けた存在と言っている。敵に回せば手強いが、味方に引き入れられるなら、それで戦の勝敗は決まったも同然になるのだ。官兵衛はその動向を問うている。

「まあ無理だろうぜ。ヤツは若いころに随分、勝家に世話になったと聞くからな。又左の性格なら柴田の軍勢に加わって全力でぶつかってくるだろうよ。その点は期待するな。他にあるか」

「筑前守様」

次に声を上げたのは例の伊賀守の戦奉行、山路将監だった。外様の陪臣である彼は秀吉を上様とは呼べず、その尊称で呼びかける。

「おう山路か。何かあるか」

配下の武将の部下、陪臣の名前まで覚えているのもまた秀吉の特技の一つだった。これもその人心掌握に役立っている。

「柴田軍の総大将は勝家ですが、実際に指揮を執っているのは大将格の二人、前田又左衛門利家殿と佐久間玄蕃（げんば）正盛と聞きます。先日に着陣した軍勢はこの玄蕃が率いて来たようです」

佐久間正盛、呼び名は玄蕃。柴田軍の中では戦上手として聞こえていた。勝家の姉の息子であり、勝家はこれを重用する事が多いらしい。さらに言えば長浜城の柴田伊賀守はこの玄蕃と仲が悪く、養子の自分を差し置いて勝家が玄蕃を重用するのに耐えきれず羽柴側に寝返ったとの噂だ。その伊賀守の家臣団からの情報である。確かだろう。

「玄蕃か。どんな男だ」

「あの佐久間久右衛門の嫡男で、常に柴田の先鋒を務める男に『ざる』」

「ほう、あの知恵の久右衛門の子か」

織田家に古くから仕える者には懐かしい名である。信長が尾張から美濃に浸出し始めたころの戦で活躍した男だ。足軽頭の一人で戦のやり方に工夫が多く、奇襲や騙し討ちを得意とする男だった。生きていれば柴田家の宿老程度にはなれた才の持ち主だったが、惜しいことに早くに戦死していた。その家督を継いだのが玄蕃である。母が柴田勝家の姉だったため、早くからその配下に入って居た。山路は説明を続ける。

「柴田では名の知られた男ですが、その戦場の経験は北の田舎侍やら一向宗やらを相手にのみ。これほどの戦は初めてでしょう」

「いずれにせよオレの敵じゃねえだろ。他に何かあるか」

あっさり断言する秀吉に一座は威圧されたように何も言わない。

「では急ぎ準備に入れ。足りぬものはこの奉行、石田佐吉に言え」

秀吉は光秀を指さす。初めての軍議における紹介代わりであろう。

「では以上だ。宿老だけは残れ」

秀吉が手を叩く。それ合図に皆が席を立った。

広間に誰も居なくなってから、秀吉は三人の宿老、秀長、官兵衛、そして蜂須賀小六に話を切り出す。

「どうにも柴田の動きが判らねえ。わざわざ街道の奥、北の柳ヶ瀬に陣を構えた。すぐ南にある天神山城にすら手を出してねえ。あんな狭い山間では決戦なぞ無理だ。しかも勝家の着陣までだいぶ時間が掛かっている。妙な動きだ。小六、おめえどう見る」

問われた蜂須賀は既に五十を超える歴戦の将であり、今回の軍議に参戦している武将の中では最高齢であった。ちよつと首をかしげてから答える。

「勝家は豪快な風を装うていますが、実際は小心者です。雌雄を決する最後の合戦を前に尻込みしているのではないかと」

秀吉はその言葉を吟味するようにしばし無言で考えた後、秀長に話を向ける。

「小一郎、お前はどうか」

「普通なら一気に南下して来るのが常道。何らかの策なのか、あるいはそれが出来ぬ不都合が柴田にあるのかだの。とにかく又左殿が敵にあるだで。用心は要るじゃろ」

「まあな。敵に回すとやっかいな男だからな。官兵衛、おめえはどう見る」

最後に声を掛けられた黒田官兵衛は密かに驚いていた。既に八年の付き合いになるが、秀吉がここまで人の意見を求めるのは初めて見た。柴田軍相手の決戦ともなると秀吉でも慎重になるのだろうか。それとも先ほどから何度も名が出る前田利家を警戒しているのか。官兵衛が秀吉の配下に入った時、既に利家は勝家の配下に在ったため、ほとんど面識が無い。加えて姫路を地元とする官兵衛には一帯の地理勘も無かった。よって手持ちの情報が少なすぎ判断が付かない。

「拙者は敵もこの地も知見がほとんどありません。ゆえになんとも」

「そりやまあ、そうか」

「むしろ上様の意見を聞きたいかと」

「俺も良く判んねえんだよ。だが無策とは思えねえ。勝家は問題じゃねえが、又左が居るからな」

前田利家とはそれほどの武将なのかと官兵衛は再度驚いた。顔だけは知っていたが、話をした事はほとんど無い。ましてやその戦がどのような物かは全く知らない。だが秀吉がここまで警戒する以上、よほどの男なのだろう。どうにも知らない事が多すぎると官兵衛は思った。

「上様、一度北の天神山城まで物見に出させていただきますか。この一帯を良く知らぬでは以後の戦で難儀しましょう」

「ああそうだな、行って来い。小一郎、お前も一緒に行って官兵衛を案内してやれ」

秀吉は少し考える様子を見せてから言葉を続ける。

「ついでに天神の城主に戦は無用と言って置け。あれは捨て城だ。今となっては下手に

抵抗されて柴田の出足を挫かれる方が鬱陶しい」

「城を捨てるのですか」

官兵衛がやや驚いたように問う。

「そうだ。数で押す以上、南の大海沿いの平野まで引つ張り出してえ。そのためには柴田の軍勢にさっさと南下してもらう必要がある。あんな狭い場所で邪魔する意味はねえ」  
大海とは琵琶湖の事だ。その東岸部には大軍の合戦に好都合な平野部が広がっている。実際、かつて織田家と浅井・朝倉連合軍の間で行われた合戦の多くはこの地が舞台だった。日本中に敵を抱える秀吉としては内輪の争いは一刻も早く決着を付けたい。柴田軍にさっさと南下して来てもらわなくては困るのである。

「他に何かあるか」

秀吉の問いに対し、三人とも何も言わない。

「では二人は今から物見に行つて来い。小六は残つて軍勢の配置を手伝え」